

るのほな

千葉大学医学部同窓会報 第79号 題字 鈴木 五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

るのほな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線2038

中日友好病院について

医学部長 井出源四郎

去る11月16日から20日迄、極めて短期間でしたが、「中日友好病院技術協力」の署名調印という任務を帯びて北京を訪問しました。ご承知のように中国は現在国是

賀正



中日友好病院技術協力署名調印式

として近代化政策を推進してありますが、この中日友好病院は保健医療面における中国近代化のモデル病院として、一昨年末、故大平

総理訪中の際に中国からわが国に要請されたもので、中国における民生向上に裨益するだけでなく、日中両国の友好のシンボルとしての深い意義をもつものと考えられます。わが国は本病院のもつ意義に鑑

完成後、門前の大通りには「桜街」の名がつけられると聞かされました。

調査協議に参加した本学関係者としては、何回かのこのプロジェクトのため団長として香月学長が訪中され、医学部からは本間、萩原、稲垣の諸教授が、また保健センター木下教授、工学部伊藤教授等が折にふれ参加され今日に至っております。

本病院には四つの使命が与えられており、(イ)日中友好のシンボルであること。(ロ)中国の伝統的医学である中国医学と西洋医学との結合という中国独自の医学を追求するモデル病院。(ハ)中国医療分野における近代化のモデル病院。(ニ)機能的に治療を中心とした教育、研究も行いうる総合医療センターであること。

以上の使命を踏まえ、本病院は総合病院(地上14階建、一〇〇〇〇床、外来診療科14)それに臨床医学研究所、リハビリテーションセンター及び看護学校を附置、総職員数二五〇〇名を予定している。今後当面三年間は開院のための準備段階に於て、病院要員養成につき協力すること、研修員(年間20名)を日本に受け入れ、また夫々の分野の専門家(年間6名)を中国に派遣するという契約が成立した次第です。病院完成後はさらに本格的な第二次技術協力が予定される。

ともあれ今後も千葉大学は、これが推進の重点的な役割を担う大学として大きな期待を寄せられることとなります。

亥鼻地区合同校舎 (旧医学部基礎教育棟) 改修工事竣工にあたって

看護学部長 石黒義彦

亥鼻地区では、新病院が昭和53年3月に完成、引続き旧病院本館の改修工事がはじめられ、55年3月医学部本館として竣工。現在医学部基礎臨床各講座、附属施設の研究の場になっております。ついで今まで約20年間医学部基礎講座及び研究施設が使用していた基礎教育棟の利用については、亥鼻地区統合整備計画に基づき改修後看護学部、附属図書館亥鼻分館、医学部附属看護学校、助産婦学校、診療放射線技師学校が共同で使用することになり、亥鼻地区合同校舎と呼ぶことになりました。

この合同校舎の改修工事は、学長はじめ本学の方々の御努力により、十分な予算をかけていただき、新築同様に完成しました。建物の内装、外装、窓枠の取替、講義室、実習室、研究室等の設備を整え、面目を一新しました。合同校舎の使用区分は、一階に看護学校と診療放射線技師学校、二階に助産婦学校、三階から四階まで看護学部、校舎東側の一階から四階まで図書分館という形になっております。

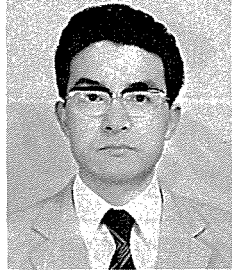
昭和56年11月17日、合同校舎改修竣工祝賀会を使用各部署の合同主催により、改装なった看護学部成人看護実習室で挙行了ました。学長、学内各部署局長、関係各位の御出席をいただき、合同校舎内部諸施設の見学後祝宴を開催、なごやかな歓談が続けられました。現在亥鼻地区では、東より新病院、生物活性研究所、医学部本館看護学部管理棟、合同校舎等の諸建物が完成しており、医学部附属実験動物施設が建築中(昭和57年7月完成予定)であり、また将来に向って亥鼻図書館分館、アイントプセンターの新當等計画されており、今後この地区の充実が期待されております。合同校舎を使用する教職員一同学生の教育にまた研究に勤んでゆきたいと考えております。

56年度秋の叙勲

- 勲二等瑞宝章 湯田好一氏(国立千葉病院名誉院長・元本学第一内科助教・昭和11年卒)
- 勲三等旭日中綬章 鈴木宜民氏(千葉大学名誉教授・昭和11年卒)
- 勲五等瑞宝章 霞 仲氏(大正9年卒)
- 千葉県政功勞 有益 忍氏(昭和22年卒・同窓会常任理事)
- 国分 信氏(昭和18年卒・同窓会常任理事)

宮内好正氏 (昭和30年卒)

熊本大学医学部第一外科教授就任



この度、熊本大学医学部第一外科教授に就任致しました。教授会の諸先生はじめ、先輩、同僚諸兄に多大の御力添いを頂きましたことを、この紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

昭和三十一年、外科医としての一步を踏み出して以来二十五年が経過しました。この間、河合教授の下では肺外科と麻酔学を修得し、綿貫教授の下では消化器外科、特

に胆道外科を学び、昭和三十九年米國留学以後は心臓血管外科の基礎作り而努力して参りましたが、伊藤教授の下で心臓血管外科に専従させて頂いたことが千葉大学の心臓血管外科に大きな進歩をもたらしました。

熊本大学第一外科は千葉大と同様、旧制六医科大学の一つとしてスタートした伝統ある教室で、初代の萩原義雄教授以来、今永一教授、浅野芳登教授、横山育三教授と消化器外科と脳外科をテーマとして来た教室です。五代目には時代の要求により心臓外科医を求めた訳ですが、一般外科と両立させ得る人物として私が選ばれたと聞いて居ります。

私としては九合目まで登った山

常任理事会 (56・12・4)

同窓会館新営案の推進を検討

現在の同窓会館は昭和26年1月の落成で、すでに三十年の星霜を重ね、その傷み方のひびきは四金会に参加する同窓会員の熟知するところである。この改築について

は、去る昭和50年、「医学部創立百周年を迎えた折に「同窓会館委員会(井出源四郎委員長)」が担当し推進することになった。しかし、諸般の事情から具体化が遅れたた

め、昭和54年7月6日の常任理事会で話し合った結果、「同窓会館委員会」と連絡を保ちつつ、あのはな同窓会の会長および副会長ならびに東京あのはな会長が会長を分担する(本誌第70号参照)ことになった。その後残念にもこの委員会の活動は進まずさらに二年を経過した。一方、あのはなキャンパスの長期計画は徐々に、しか

し確実に進展しており、また同窓会館の陳旧化もたしかに進んで来た。今回の常任理事会においては、従来の「同窓会館委員会」とは別個に、信州大学旭会館をはじめ、二、三の大学の会館について調査したところを基本に、現状において実現可能なものという基本構想により作った粗案につき村山常任理事よりスライドを用いて具体的に説明があった。要点は①現在の同窓会館の規模をもつ鉄筋コンクリート二階建(Ⅰ案とⅡ案を提示)とし、建設地としては現在地あるいは連絡道路周辺地区等を考慮す

る。②総工費七、八千万円。工期6ヶ月前後③国費に依存すること極めて困難とみられる故に、同窓会員の拠金(一口二、三、五万円)に頼る他ない。④完成後の管理運営に人員配置は望めない。その具体的な方策を建てる。等々の説明があり、熱心な討議が行われた。その実現を期するために、先の「同窓会館委員会」を発展的に解消し、「医学部およびあのはな同窓会」により構成される新同窓会館を実現させるためのあらたな委員会をつくる」ことが基本的に了承され

た。従って次回(57年2月)の常任理事会においてはさらに一歩進んだ検討が行われるであろう。なお常任理事会開催の日に久員貞治先生他界された国分信会計監事の御霊へと共に一同弔意を表した。(出席者)小林金市(会長) 嶋田宗之、井出源四郎(以上副会長) 佐藤保雄(会計監事) 中村民比古(東京あのはな会長) 内田成和、斉藤弘、石川清文、萩原弥四郎、越川衛、村山智、奥井勝二、永野俊雄(以上常任理事) 計十三名。

各地あのはな会

富山あのはな会

立山連峰が夏空に聳え立つ去る7月4日、富山地区あのはな同窓会が、母校より木村康、岡本昭二両教授をお迎えして、富山市の料亭加賀屋で盛大に催された。

幹事役は片山喬教授と高岡市で外科病院を開業されたおられる野本昌三先生(昭和32年卒)で、両先生が同窓会名簿をたよりに富山県にご在任の先輩を歴訪され、当日の開催にこぎ着けられたものである。



既にも本誌で報告されたように、富山医科大学には窪田晴夫、片山喬、辻陽雄の三教授が主宰される眼科・泌尿器科・整形外科の三教室があり、また附属病院・和漢診療室には室長以下4名の同窓

が活躍中である。これらの同窓の総計は大学関係では21名に達する現況である。

当日の参加者は滑川市の岩城常次先生(大正8年卒)、小西善磨先生(専18年卒)、橘益永先生(昭和20年卒)、幹事の野本先生、大学から18名が参加し、総勢22名の盛況

となった。木村・岡本両教授から最近の母校の動きが詳細に報告され、「試案として仮りに引いた図面が突然ひとり歩きをしてみよう」話などユーモアと臨場感あふれるお話に一同爆笑の内に懐旧の情を催した。参加者中、最長老の岩城先生は大正年間に千葉で遊学し、再び郷里で活躍中であるが、86才とは思えぬ矍鑠たるお姿で、本会が催されたことを心より喜んでいただいた。千葉を離れて50有余年、今でも新聞をひろげると「千葉」の字が真先に飛びこんでくる」という話には、一同深く同感するものがあつた。

同窓会とは母校を同じくするというひとつの縁で結ばれる思えば奇妙な集団であるが、母校をいづくしむ心は、人間のすなおな情というものがあろうか。ひとわたり自己紹介の後、次期幹事を、玉真哲也、中田瑛浩両助教と決定、野口哲也君の司会で余興に入り、館崎慎一郎君、伊藤隆君など、美声、迷演技を肴に銘酒「立山」を傾け、和気あいあいのうちに時の過ぎるのを忘れて、午後9時、岩城先生の発声で母校と富山あのはな会の発展を祈念して、万才を三唱し、結びとなった。

寺沢捷年(昭45卒)



第82回日本外科学会総会 千葉市で開催近し

日本外科学会総会々々を本学園関係者が務められたのは三輪徳寛、高橋信美、瀬尾貞信、河合直次各先生であり、いづれも東京で開催された。今回佐藤博教授が82回総会を運営されるが、千葉市で開催されることになり、長い歴史のなかで画期的なことである。その抱負のほどを承った。



佐藤博
(昭和20年卒)

第82回日本外科学会は、来たる4月2日(金)〜4日(日)の3日間、千葉市で開催されます。会場は文化会館、市民会館、教育会館、自治会館、塚本ホール、大学記念講堂などが使用されます。

日本外科学会では日本の外科学系学会の中で最大のもので、現会員は約二万人であります。今回の学会にも約三、四千人の会員が千葉に来るものと推測されます。

本学会の内容を紹介致しますと先ず、外人招待講演としては、Dr. John S. Najarian, Dr. Arthur E. Bane, Dr. I. Vogt-Moykopf, Dr. James D. Hardy, Dr. Earl R. Owenの5人の教授にお願いしてあり、各々専門の分野で世界のトップレベルの講演が聞かれるものと思われまふ。

問題点、③腫瘍外科治療の問題点 ④直腸癌の遠隔時機能よりみた根治術式の選択の4題を選びました。シンポジウムとしては、①リンパ節郭清よりみた下部食道噴門手術、②心臓手術の要訣、の食道と心臓の二つにしぼらせて頂きました。

更に、教育講演としては、長尾房大(慈恵大)、阿部令彦(慶大)、早田義博(東医大)、池田恵一(九大)、牧野博安(千大)、米沢利英(千大)の各教授に専門分野での講演をお願いしてあります。また、私の手術を企画致しましたが、代表的手術手を映画によってみせていただくとするものであります。演者の先生としては、掛川暉夫(久留米大)に頸部食道癌を、正岡昭(名市大)に肺癌を、井上正(慶大)に大動脈瘤を、秋山洋(国立小児病院)には小児外科を更に形成外科の映画も予定して居ります。(以上敬称略)

一般演題は今回、千二百題以上の応募があり、出来るだけ多くの人に発表をお願いする様心掛けました。そこで口演としては約五百題、示説としては約二百題近く、又、シネクリニクとして四十数題の映画を採用致しました。

以上、第82回外科学会の大筋を述べましたが、教室員並びにその関係者の入道も一丸となつて、その準備に当つておられますので、出来るだけ多くの人達の御参加を望みます。日本の外科の指導的立場にある本学会を有意義なものにいたしたく、皆様方の御協力をお願い申し上げます。

高知のほな会

千葉を遠くはなれた高知には、るのほな会、会員は少なく淋しい事でした。

昨年迄の8年間は少人数ながら安中先輩(昭5卒) 県立女子大、学長を中心に年1〜2回集まり、和気藹々の内、楽しい会を過してまいりました。

昨年安中先輩が退官され長崎に帰られてからは意気上らない状態でした。

今度新設の高知医大もいよいよ附属病院ができ10月12日に開院式の運びとなり、基礎・臨床の教授陣も勢揃い致しました。

千葉からも外科に田宮教授、免疫学に藤本教授が赴任されました。各々の医局と老年病教室と合計7名の先生方を迎えることができました。丁度、佐藤教授が開院式にかけつけられたのを機に市内の由緒あるホテルに新入りの先生方をお呼びし、旧会員ともども最初の会合を致しました。

東京のほな会

東京女子医大との懇談会

従来、東京のほな会の会合は、新年会と総会の二回行われていたが、特に目玉商品ともいふべき企画がなく、会員の出席も今一つという感じが否めなかつた。そこで会員有志の中から、折角千葉大学出身者が都内の大学病院や幹幹病院に勤務されているので、この方々と勉強会を兼ねて親しく語り合い、開業会員側からは難しく症例を円滑に転送できる様に、また病院勤務の会員側にあつては、東京のほな会の組織を利用できる様なルートを作つたらという意見が自然発生的に持ち上つた。

まず最初に都内で本学出身者の多い東京女子医大が候補にのぼり、消化器病センターの遠藤主任教授、山田助教の御骨折で、昭和五十六年十月三十一日(土)同センターのカンファレンス・ルームでは、第一回の懇談会が開かれた。当日は、羽生富士夫教授(昭和29年卒・外科)の「膵臓癌の新しい手術」について、次いで小幡裕教授(昭和28年卒・内科)の「肝

江戸川のほな会

昭和55年11月13日、恒例の江戸川のほな会秋の総会が新小岩の有田で開催された。大学からは脳研萩原、小児科中島両教授の御出席を戴き、江戸川のほな会員は、中村民比古都長のほな会長、福原公明城東支部長、小竹稔夫江川川のはな会会長をはじめとして、山上健次郎(昭17)、今井力(昭22)、佐々木守道(昭23)、目々沢俊夫(昭25)、中村憲三(昭25)、藤山嘉信村瀬靖、伊谷昭幸(昭30)、滝沢明

一躍15名になった。高知のほな会、は近藤先輩の会長の下に、年二回の会合をもち、医大と緊密な連絡をとり楽しい会にしていこうつもりです。

高知のほな会名簿
高知医大関係・田宮(昭27・外科)
小越(昭38・外科)、山城(昭49・

炎について」という講演があり、多大の感銘をうけた。

次いで遠藤光夫教授(昭和31年卒)、木下祐宏教授(昭和32年卒)、浜野恭一教授(昭和33年卒)、鈴木博孝助教(昭和34年卒)、山田明義助教(昭和35年卒)、鈴木茂助教(昭和35年卒)、中村光司助教(昭和40年卒)、高崎健講師(昭和42年卒)、さらに林恒男(昭和44年卒)、吉田操(昭和44年卒)、濱陽高穂(昭和45年卒)、長谷川利弘(昭和46年卒)、村上正(昭和45年卒)の各先生方より自己紹介が行われた。女子医大側と一般会員の出席者を合わせると六十余名の大きさに達し、懇親パーティーにおいても一層の盛り上りをみせ、時の立つのを忘れるほどであった。

この会を最初として、各大学、病院の御協力を得て、実のある会合を続けて行きたい。

神田尚忠記(昭和32年卒)

四頁下段につづく

久留米大学医学部第二内科だより

教授 谷川久一 (昭和32年卒)

昭和三十九年に久留米の地に来て、はや十七年になります。二、三年のつもりが、こんなに長くになりました。九州に住みよいところだからかもしれません。また昭和五十二年より第二内科を主宰することになり、教室も急速に大きくなり、現在教室員が一五〇名を越す数となり、大学のなかでは一番大きい教室です。私は千葉においていたとき、三輪内科という大きい教室におりましたので、そのよい点と不利な点があったことを思い出しています。なんと云ってもよい点は、自由に勉強が出来た点でしたが、白壁、市川、東條、伊藤先生その他秀れた先輩の先生方が生れる原因になったのでしよう。私もその点留意したく思っています。同時に三輪先生も大変御苦労があったろうと今にして考えています。現在の私の教室は九大をはじめいろいろな大学出身者も入って多彩な顔ぶれですが、ぜひ母校の千葉からも来て戴きたいと思っております。私の教室を自慢するわけではありませんが、やる気のある方は、まわりからも助けられてどん／＼仕事が出来ると思っています。教室の専門は消化器疾患ですが、ともに肝臓病に主力をおいており、A型肝炎、胆汁うっ滞、肝癌などに研究の中心をおいておりますが、

近い将来、東京女子医大のようなセンター形式の臨床システムを作り、九州の医療の中心になるように私のような若い教授たちは考えて、実現にむけ努力をしております。そのために全国から秀れた人材を求めなければならぬわけですが、九州の地も交通機関の発達により(東京―福岡一時間半、福岡空港―久留米バス四十五分)東京から近い地になりました。昭和五十六年度は整形外科学会、臨床眼科学会(小生が主催)など全国学会が久留米で開かれましたが、皆様方も久留米や九州に来られました機会も多くなっていると思われ、どうぞその折にはお訪ね下さるようお願いいたします。心から歓迎致します。

ゲッティンゲン大学だより

高野光司 (昭和33年卒)

ゲッティンゲンは山の中の小都市である。人口は約12万。ハルツの山にも近く、ハイネの「ハルツ紀行」はこの町に始まり、「市役所の村下レストランのビールはうまい」とその第一頁に書いてある。ハンザ同盟に属した旧市街を護る壁の上は今も散歩道になっている。アメリカからの留学生が多かった故に、ハイデルベルグと共に空襲をまぬがれた。

町の壁から東へ一軒程住宅街を通つたらからと登ると、ハイネベルグという大きな森にぶつかる。ここから町を見下すと、十四、五世紀に建てられた旧市役所や教会

の塔が赤い屋根と緑の間にそそり立っているのが見られる。町を越えて目を移すと、ウエーザーベルグラントの山の上に、ガウスが三角点とした場所に立つ塔がかすかに見える。千葉医大が矢作の森を背負つていた頃、千葉でも生理学を、そして晩年には西洋医学史を講じておられた永井潜先生が、「千葉は日本ゲッティンゲンである」と云われたと、故鈴木正夫先生から聞き、永井先生には一九〇一年この地に遊学された後、東大教授になられた。「月沈原」とは永井先生が書かれたあて字である。

大学は一七三七年の創立当時から、医学・解剖・植物学の教授を兼ねた生理学者、アルブレヒト・フォン・ハラエ等の学者の故にヨーロッパにその名が高まり、学生達はこの山の中の大学に集まって来た。「詩と真実」によれば、ゲッティンゲンの大学に学ぶことを切望していたが、何故か父の反対で実現しなかった。しかし後に三度この大学を訪れている。旧市街を十分間も歩けば、ブンゼン(バーナーの、ヘンレ(係蹄の)コッホ、グリム兄弟、フンボルト兄弟、ヤング(弾性率)ビルロート(胃切除術)、ハイネ等の住んだ家の前も通ることが出来る。ユダヤ人と女子が初めて学生として登録されたのも、女子の博士としての大学講師が始めて生れたのもこの大学という。ハノーファー王の一方的憲法放棄の通告に、教授達が抗議書を提出した有名な「七教授事件」は、大学の百年祭の年(一八三七)にあたる。この七教授の中にはグリム兄弟や電磁単位の名に残るウエーバーが含まれる。一九五七年にはハイゼンベルグ等の核武装に反対する「ゲッティンゲン宣言」が出された。ゲッティンゲンは学問と自由の町である。大学の他にもこの地には四つのマルクス・プラウダ研究所、科学映画研究所、航空力学研究所、パツ所(この辞典はグリムが、ローマン字の「ゲ」まで書き、第二次大戦後東西ドイツの協力で完成、今は改訂の作業中)がある。この町に

学んだ人から三十人のノーベル賞受賞者を出している。そのうち現役の大学の教官であった人は十六人である。さて現在大学は二万五千以上の学生をかかえている。医学部学生は一学期二五〇人、年に換算すれば五〇〇人もおり、マルクスプラウダ研究所の生理学者の数を加えれば百人近くになろうか。しかしそれにしては学生数は多すぎる。この大学を千葉から訪ねた方々は、故鈴木正夫名譽教授、小林名譽教授、井出医学部長等数知れぬ程であり、留学した人も十指に余りたのみならず、その名著「近代医学の史的基盤」は当大学図書館の蔵書にもなっている。八一年六月、千葉大学国際交流委員長本間教授は、カムプ学長、グレイグル医学部長を公式訪問し、また当大学医学部「千葉大学との提携のための臨時委員会」のメンバーと本間教授夫妻とは、本文頭へのべた「ビールのうまいラッツケラー」で会食した。同委員の一人クーン教授は七九年千葉大病院で高見沢教授の優れた手術を見ているが、ラッツケラーの席で「提携によって我々には利する処があるのか」という発言をしたということをお伝えして、同窓諸氏とくに大学を守っておられる諸先生の一層の御発展を、はるかに祈りつつ稿を閉じます。

(三頁より続き)
祐(昭31)、岩倉弘毅(昭37)別格として塚塚八十一(昭4)の会員が参加した。
小竹会長の挨拶ではじまり、萩原・中島両教授から本学の現状、入試や国試の状況等のお話をうかがって、村瀬幹事の司会で全員が自己紹介を行った。今回特に出色だったのは塚塚会員で高令にもかかわらず、出席され、お体も言葉も御不自由のため、中村都会長が一々通訳をしたら茶々を入れたら、出席者が笑いをこらげる始末であった。今総会は準備段階で、準備委員長長格の岡田毅(昭19)が病氣のため入院されるといことがあり、連絡の不手際もあって、出席者が平常より少なかったのは幹事の責任で次回を期したいと思う。(幹事 村瀬 靖・伊谷昭幸)

同仁会創立50周年 記念式典開催

財団法人同仁会は、昭和六年財団法人救済会を継承、創立して本年満50周年になり、去る11月14日(土)、千葉市ロイヤルプラザホテルで祝賀会を開催した。同仁会は千葉大学医学部附属病院の発展の背後において、常に「黒子」的存在として今日まで活躍を続けてきた。とくに戦後の物資難のときは、入院患者の給食を如何に賄うかに苦勞したなどの話も披露された。同仁会の会長は附属病院長ということもあり、歴代の病院長も多数出席され、盛会であった。

国保成東病院

院長 日浦利明 (昭和37年卒)

国保成東病院は昭和二十八年六月、成東町ほか二十三ヶ町村の組合立病院として、初代院長に現二外科教授の佐藤博先生を迎え、外科、産婦人科の五十一床で発足しました。現在は東金市、成東町、九十九里町、山武町、松尾町、芝山町、蓮沼村の一市六ヶ町村で病院組合を構成し、成東町長が開設管理者となっております。

大学からは東金有料道路、国道一・二六号線と僅か三十分の位置にあります。緑豊かな田園風景の中に近代ビルが一つある観を呈しています。更に最近、六階建総床面積五八四二㎡の白亜のビルが完成し、十月二十七日より新病棟で入院患者の診療を始めました。

診療科目は、内科、外科、産婦人科、小児科、整形外科、眼科、耳鼻科、皮膚科、脳神経外科、麻酔科の十科目を標榜しています。

医師は内科三名、外科四名、産婦人科一名、脳神経外科一名の九名が常勤で、他は非常勤医師です。

パラメディカルには、薬剤師四名、検査技師三名、検査員六名、栄養士二名がおり、全職員は百三十名です。目下旧病棟の改装工事が行われており、来年三月に完成しますと、百十床から二百二十床と倍になります。この増床に伴い職員増員と質の向上を計っております。医療設備も、全身用C.T.S



キャン、超音波装置による診断部門やハイブリッドシミュレーション部門の整備もなされ診療担当者の来るのを待っています。医師住宅はじめ職員官舎の整備も行いつつあります。

ソーラーシステムを一部に採り入れた新病棟には、研修室、会議室、図書室等も完備したので、今後臨床カンファレンスやC.P.Cも行われると思います。剖検件数が少ないが、臨床病理検査室と解剖室が完備したので、剖検率の向上に努めます。山武郡市医師会と協調して公衆衛生活動も出来るようにしたいと思っております。

灰聞するところによると、町役場が近代建築の手により近々病院の傍に移転するとの由、国道一二

清水厚生病院新築落成

院長 高相豊太郎 (昭和28年卒)

昭和三十四年五月、金田丞亮院長と共に清水の地に参りまして十七年に新築移転しました病院をこの度、二度目の新築移転を十一月一日開院致しました。清水地区の中心病院を自負して来ましたが、質、量共に不足が目立つ様になり又、東海地震も言われる現在、我々は使命感を持って二度目の新築を意図した訳です。

幸に厚生連理事者の理解を得る事が出来、地区農協、県、市等よりも多大な援助を戴き完成する事が出来ました。

ベット数は三百八十床ですが、規模は三倍強になり又、「従来の病院のイメージから脱した」建物と評判されて居ります。

これからは一層の内容の充実に努め、地区の皆さんに安心して頼って貰える病院を目指したいと思います。

同窓諸氏も多く勤務して居られ夫々忙しい毎日です。近くにお出掛けの際には、是非共にお寄り下さいます様お願い致します。



大学の関連病院として、研修指定病院になれるよう鋭意努力する所存です。各教室の御指導と御支援をお願い致します。

所在地
千葉県山武郡成東町成東一六七
電話〇四七五八一・二二五二二

昭和26年卒業生クラス会

三十周年を祝う(56・11・21)

昭和26年といえば朝鮮戦争がはじめて間もなくであり、今は古ぼけてしまった同窓会館が落成した年であった。卒業試験の最中に世紀の大雪が降ってキャンパス内でスキーができたという嘘のような情景がみられた春を思い起こすとやはり三十年は短くない。

去る十一月二十一日、クラスの半数を超える四十名程が東京駅八重洲口前のホテル国際観光に集り、三十年間にただ一人他界した大谷崇男君の霊に黙祷を捧げた後、閑

根博君の司会でにぎやかな会を持った。この種の会合にはめずらしく一人も来賓を招かず級友だけの会にしたことは、このクラスの歩んだ三十年のある種の苦難の道を示したのかも知れない。酔いほどよくして肩を組み、昔の高校寮歌を歌っていた一群が非常に印象的であった。クラス一同で医学部本館ホールに記念の大時計を贈ったことは本誌第75号にすでに報じられている。(村山 智記)

昭和34年卒クラス会(山紫会)開催

卒業22年を迎えたわがクラスは母校に残るのは、須永看護学部、横山宏(教育学部)、川名医学部)の三名だけになったが、全国各地で活躍しており、九名の教授を輩出している。

卒業20年記念事業であった記念植樹と記念アルバムの完成を祝つてのクラス会は、11月14日熱海の山水旅館で開かれた。

植樹は原沢らの努力で新病院前に記念碑と共に植えられ、又アルバムは五十嵐、須永、谷嶋らの編集委員が二年余にわたり毎月集つてようやく完成したもので、ずつと在米生活を続けている草文鑑、許端枝も加わって全員参加のすばらしいものをつくる事ができた。

今回のクラス会は、玉真、矢野、横山哲が幹事となり、会場の旅館は熱海のどまんなかにもかわらぬ、閑静で小じんまりとしており、

他の団体客は居らず貸しきり同様であった。

23名が集まったが、鹿児島大法の津金沢が久しぶりに参加し、盛会であった。老眼を訴えたり、頭髪のうすくなった者もかなりいたが、集まるとすぐ学生時代の気分にもどり、わいわいと賑やかであった。会はまだ最近なくなった久根間君への黙祷ではじまった。酒をくみかわし、近況を語りあつた後、余興に移つたが、植村の落語、兼重のコント、横山哲、松本、鈴木達らのカラオケが披露されたが、なかなかのものであった。その後は旅館内のバーや各部屋に席をうつし、唄つたり、しゃべつたりと一時過ぎまで笑声が絶えなかつた。遠藤、永井、鈴木高は将棋をやっていた。翌日の有志のゴルフコンペでは東と玉真の活躍が目立った。(川名正直記)

日中友好のかけはし

第一期研修生を送る

10月15日、帰国の迫った日中友好病院の第一期研修生を送る会が市内東天紅で催された。まず井出医学部長は「かねて計画していたこの会をやつと今日持つことができた。今回の研修は日中兩國のために欠けてはならないパイプの一つであり、ますます太くたくましくして行きたい。今夕は関係者だけの集りなので気軽に発言して欲しい」と述べて開会。

香月学長の「中日友好病院は必ず計画通り出来る、諸君は日本での経験の内容を卒直にまわりの人に伝え、病院が出来たらそれに魂を入れて欲しい」との激励の挨拶のあと、渡辺病院長の発声で乾盃ついで魏殿純氏が一同を代表し、「この半年近くの間、あらゆる面からのご指導、ご援助をいただき成果が上ったと思う。今日は送別会であると同時に謝恩会である」として学長・学部長宛に「仙頂丹色」と題された羽毛浮貼の額を贈った。右肩に千葉大学医学部留念(傍点筆者)と書かれ、左側に中国北京中日友好病院第一期研修生贈と認められた。(この額はいま医学部長応接室に掲げられてある。

感想が述べられた。魏殿純氏 新しい技術を教えてもらった。このような日本がうらやまになり、10年20年後にはこのようになりたい。金子教授 方々へ一緒に行ったがよくメモを取り、熱心に現状を把握しようとして努力していた。張書伝氏 プラスチック外科など多くのテクニクを習った。国へ帰ったら日中友好に役立ちたい。岡本教授 一カ月半は鬼塚教授の処に通ってもらった。勉強をよくし、性格もやさしい人である。王華英氏 第二外科は高度の外科教室であり、キビシイが良かった。国へ帰ったら友人に日本の外科の技術を紹介するつもり。佐藤博教授 一番若く、すばらしい人で、二外科中のものが友人になった。村山教授 金さんとは同年輩、国を越えても通じ合う。仕事の面でも良い論文が出せ、私も捻りが多かった。中国の地図を見るようになった。金恩波氏 半年で研究が完成できた。親切な指導鞭撻のおかげである。深い感銘が残る。井上教授 同年輩の二人を預った張氏は英語が上手、劉氏は日英ともダメであったがニコニコしていた。はじめは筆談であったが、二人とも日本語が上達した。最後の二カ月は関連病院を廻った。

張光鉞氏 六カ月は長くはないが自分にとって収穫が大きかった。訪れた病院は皆キレイで友好的であった。魏維氏 熱心に教えていただいた。スケジュールが良く作られており他の病院を見るチャンスも与えられて有難かった。黄書琴さん 一内だけでなく県下の病院・研究所を訪ね、新しい珍らしい事実を勉強した。中国に帰ったら一生果敢大努力したい。土屋助手 期待通りの人であった。大づかみにものを握ることの上手な人であると思った。

このあと今回の研修生ではないが、中国留学生を預っている熊谷教授の挨拶の後記念撮影、日本の中華料理とビール、マオタイ、紹興酒に飲をつくしつの一夕であった。なお私(萩原)とともにこの三月北京に行った稲垣教授、留学生受入れの事務的採配をふるった巻島事務部長も医学部でそれに当たった多田事務長、豊田庶務係長を代表して発言「小授鶏は50年前に福建省から来たが、それが今日本中にあるようになった。第一回の種子が広がることを祈って居る」と述べたが、これがこのことにかかわる一同の共通した願いであるといえよう。(萩原弥四郎)

解剖慰霊祭と白菊会千葉支部総会

昭和56年10月17日午後2時から恒例の解剖慰霊祭が遺族および関係者各位の出席のもとに医学部記念講堂で行なわれた。本年は第54回で合祀体数は系統解剖39体、病理解剖256体であった。しめやかな中にも盛大に行なわれた。これに先立つ同日午前中に白菊会千葉支部総会が行なわれた。これは本学に白菊会支部が設立されて15年にして始めてのこと(従来は全国的な白菊会総会に参加していた)である。齊藤支部長、井出医学部長の挨拶のあと、広瀬講師(一内)の老人の健康に関する講演が、医学部本館カンファレンスルームで行なわれた。80余名の出席があり盛会であった。

なお、白菊会とは篤志解剖献体団体で、本学に支部が発足した当時は数名の小団体であったが、齊藤支部長らの献身的努力により、現在は約五〇〇名の会員を有するに成長し、この間の実際に献体され、医学教育研究の役に立たれた方は90名に達している。ただ、本学における解剖学実習の遺体を充足するには、約二〇〇〇名の生

評書

渡辺真知子遺稿集「青葉照り」

白い本の愛と悲しみ
師走が来るといいたいた数々の句集を改めて拝見しながら整理する。「青葉照り」は今年いただいた十何冊の中で忘れ難い名句集で、その白い表紙の内にある透徹した美しさには耐え難いまでの輝きがある。目離さば崩れむ憂青葉照り

第58回千葉医学会学術大会
第27回千葉県医師会学術大会
連合大会

日時 昭和57年1月23日(土)
14:30より
会場 千葉大学医学部
附属病院第1講堂

冠・大動脈疾患をめぐって

- 川崎病と冠動脈障害
日赤医療センター 小児科 川崎富作
- 冠疾患を中心として
千葉大学医学部第3内科 齊藤俊弘
大動脈疾患の非視血的診断 増田善昭
千葉大学医学部第3内科
- 大動脈および分枝動脈疾患に対する外科療法
熊本大学医学部第1外科 宮内好正

司会 稲垣義明・奥井勝二

編集後記

存会員が必要であるとのことで、医学部の白菊会に対する深い理解が切望されている。

の作は「沖」五周年記念号に応募された「青葉照り」という随筆の中心をなすもので句集の題名の由来句でもある。

春水の迅さにおのれ失へり
貝ボタンひとつが欲しく梅雨の街
乗換駅に男の流れ夜の秋
凍てる湖罪深々と沈めたし

このような文学性豊かな句を作られた女性にどうしてお目にかかる機会に恵まれなかったのであるうか、それも私と同じ生れ年の方というのに。

乳癌や片乳を抱きそぞろ寒む
癒えてまずセルを掛けし夫の背に
このすぐれた俳句作家は昭和53年秋五十才代のはじめというのに世を去って行かれた。そして夫なる方は、今附属病院長として御多忙な渡辺昌平教授である。三年位すぐたつてしまします」というあとかぎの書き出しの一行には渡辺教授の万感がこもって余計に悲しい。(村山さとし)

○昭和57年の新春を迎え、会員諸兄の御健勝をお慶びし、本年度の御活躍を御期待致します。会報79号は新春号にふさわしく、医学部長、看護学部長から千葉大学の歴史になる玉稿を頂き、さらに各地で活躍されている会員の抱負、地区るのはな会、クラス会などより等の記事もあり、聊か窮屈な配列で写真も掲載できない記事もあつたことをおわびします。

○本年一月一日の朝日新聞によりますと、多田富雄東大教授(34年卒)には免疫抑制T細胞と抑制因子の解明で朝日賞を受賞された。千葉大学医学部出身者の本賞受賞は、白壁彦夫・市川平三郎・熊倉賢二の三先生が胃の二重造影法で受賞以来で誠に慶ばしいことである。

○同窓会館新築について、村山常任理事に御執筆頂きましたが、30有余年の風雪に耐え、十二分その使命は達したことは認められる処で、これから入会してくる会員の為にも先輩として、是非御協力をお願いするものであります。(奥井勝二)